

知多半島の 新しい医療体制 解説ガイド

新名称決定

半田病院



知多半島総合医療センター

常滑市民病院



知多半島りんくう病院

特別掲載

2025年に新法人誕生で何が変わる?

未来につなぐ半田市と常滑市の
地域医療の「今」



地方独立行政法人
知多半島総合医療機構



「知多半島総合医療機構」

半田市立半田病院は「知多半島総合医療センター」へ、

常滑市民病院は「知多半島りんくう病院」へ。

私たちは新たな名称で、知多半島医療圏に医療を提供します。

「知多半島総合医療センター」は、救急救命センターを擁し、高度急性期医療に特化。

「知多半島りんくう病院」はリハビリテーションや地域包括ケア医療に注力します。

2つの病院は、大きな変化を迎えます。

この変化の基盤となるのが、

2つの病院が経営統合して生まれる

地方独立行政法人「知多半島総合医療機構」です。

地域の中核病院が診療機能を分担し、

お互いに連携しながら、

急性期から回復期まで、

切れ目のない医療を提供します。

未来に続く地域完結型医療をめざして。

いま、「知多半島総合医療機構」から、

地域へ医療を提供するための

新体制がスタートします。

2025.4 新体制スタート

知多半島総合医療機構

半田市



地方独立行政法人 知多半島総合医療機構
知多半島総合医療センター



常滑市



地方独立行政法人 知多半島総合医療機構
知多半島りんくう病院



▶ 知多半島りんくう病院

▶ 知多半島総合医療センター

2025.4
名称変更



リハビリテーションや地域包括ケア
長く地域で暮らすための医療に注力

2025年4月に名称変更する「知多半島りんくう病院」(現・常滑市民病院)が診るのは最後まで住み慣れた地域で過ごすための医療。回復期リハビリテーション医療や、病院・在宅で患者がより良い医療を受けられるよう地域包括ケアに力を注ぎます。またそれに加えて、平日日中は外来での救急など急性期医療も担います。

2025.4
移転・
名称変更



新たな場所で地域の命を守る
三次救急医療機関としての役割を担う

2025年4月に半田びよログスポーツパーク(半田運動公園)の東側へ移転・開院する「知多半島総合医療センター」(現・半田市立半田病院)。救命救急センターによる高度急性期医療やがん治療などの化学療法、放射線療法、手術療法を集中的に担う予定です。スムーズな救急搬送のための道路整備や屋上へのヘリポートの設置も進めています。地域の災害拠点病院としての役割も担います。

information

TEL: 0569-35-3170

所在地: 常滑市飛香台3丁目3番地3

駐車場: 有(約150台)

休診日: 土/日/祝/年末年始(12/29~1/3)

information

TEL: 0569-89-0515 ※2025年3月末までは「0569-22-9881」です。新しい番号は4月1日まで繋がりませんのでご注意ください

所在地: 半田市横山町192番地

駐車場: 有(約450台)

休診日: 土/日/祝/年末年始(12/29~1/3) ※救命救急センターを除く



大注目!

2025年に新病院誕生で何が変わる? 未来につなぐ半田市と常滑市の 地域医療の「今」

今、知多半島の住民の間で話題なのが、2025年春、半田病院が
つの市がそれぞれ運営する大きな公立病院が、一つの法人となり
や背景があるのか。私たちの生活に深く関わる地域医療の最新事

移転に伴い隣町の常滑市民病院と経営統合するというニュース。2
経営統合するのは全国でも例が少ないこと。そこにはどんな意図
情をわかりやすく解説します。

取材・文/スギウラミエ、編集部 撮影/奥村一之 イラスト/岸 潤一 デザイン/編集部

知多半島の地域医療を支える
新しい公立病院の「カタチ」とは？

超高齢社会の日本では
医師や必要なベッドが不足

2025年4月、「半田市立半田病院」が半田びよログスポーツパークの東側に移転すると同時に、近接する「常滑市民病院」と経営統合し、両病院は「地方独立行政法人知多半島総合医療機構」という新たな組織に生まれ変わります。両病院の経営統合は2018年より協議されてきましたが、それがいよいよ現実のものとなり、「2つの大きな病院がタッグを組むことで、より安心して医療を受けられる」と期待を寄せる地域住民は多いでしょう。その一方で、「経営統合のメリットがわからない」「今までと同じように病院にかかれなくなったらどうしよう」といった漠然とした不安を抱えている人もいます。

2つの違う市の公立病院が地方独立行政法人化し、経営統合することになった背景には、日本の医療が抱える大きな課題がありました。今回の経営統合の目的をきちんと理解するために、まずは課題の話から進めましょう。

一つに、いわゆる団塊の世代が75歳の後期高齢者となり、高齢者人口がピークを迎える2025年に、医療・介護のニーズが急増することがあります。慢性疾患や複数の疾患を抱える高齢の患者が増え、一つの病院で治療を完結するこれまでの「病院完結型」の医療から、患者が住み慣れた地域で自分らしい暮らしを続けられるように医療、介護、福祉などの関係機関が連携して、地域全体で治し、支える「地域完結型」の医療



▲半田びよログスポーツパークの東に移転する新半田病院は、地下1階、地上5階建て、屋上にはヘリポートも整備される予定。病院までの主要道路の拡幅工事も予定されている

への転換が課題として挙げられています。その課題解決のための「受け皿」となる地域の病床(ベッド)や在宅医療体制、介護保険施設などの充実が急がれます。そこで、国はこれまでの地域医療提供体制を見直し、政策として「地域医療構想」の整備を強く推し進めているのです。

変わる医療ニーズに応えるため 国が推し進める地域医療構想

「地域医療構想」とは、超高齢社会にも耐え得る持続可能な地域医療提供体制を構築するため、2017年に策定された取り組み。その主な目的は、医師・看護師などの効果的・効率的な配置や、年々増え続ける医療費の抑制です。転換期となる

2025年度の実現に向け、整備が進められています。

具体的には、都道府県が設定する二次医療圏(複数の市区町村で構成され、一般的な保健医療需要に対応する区域)単位で、「高度急性期」「急性期」「回復期」「慢性期」という4つの医療機能ごとに、2025年に必要となる病床数を推計、それをもとに地域の実状や将来の医療ニーズに合わせ、病床の機能分化やほかの病院との連携を自主的に進めるといった取り組みです。国はまず公立・公的病院から再編・統合を促しています。

国としては、急性期(医師や看護師などを手厚く配置する必要がある)の病床が過剰となった現状を踏まえ、今後さらにニーズの高ま

公立病院は どんな役割を担っている？

公立病院とは、都道府県や市町村といった自治体が運営する地域の基幹病院のこと。全国に859院あり(厚生労働省「2022年度病床機能報告」)、公益性が高い医療を提供しています。主な役割は、救急医療や小児医療、周産期医療、災害医療、精神医療などの「不採算・特殊部門に関わる医療」をはじめ、民間病院では限界のある「高度・先進医療」、「過疎地への医療」の提供などです。公立病院と聞いて、新型コロナウイルス感染症の拡大時、積極的な病床の確保や入院患者の受け入れ、発熱の外来の設置などを担ってくれたことを思い出す人もいないでしょうか。市民の命と健康を守る砦として安心を与えてくれる、地域医療にとって不可欠な存在、それが公立病院なのです。

性期、回復期リハビリテーション、地域包括ケアを担い、入院を要する患者を受け入れています。二次救急医療機関として救急患者も受け入れており、知多半島医療圏の救急医療体制において大きな役割を果たしています。

また、2015年に現在の場所に移転し、中部国際空港(セントレア)に近接したことから国内4番目の「特定感染症指定医療機関」としての

機能も。新型コロナウイルス感染症流行時には迅速に専用病棟を設置・改修するなど、先進的な取り組みを行ってきました。

ライバルではなく統合して 医療提供体制の強化をめざす

今回の経営統合のきっかけは、建物の老朽化が進み、新病院の建設に伴い移転先を探していた半田病院が、2018年3月、常滑市民病院

の高齢患者のための回復期(在宅復帰するための医療やリハビリテーションなどを行う)の病床への転換を促したいという思いがあります。2016年に愛知県が策定した「愛知県地域医療構想」でも、半田市と常滑市が含まれる知多半島構想区域では、2025年度は急性期を担う病院の病床数が過剰となっており、逆に高度急性期、回復期、慢性期は不足することが見込まれています。

もう一つは、地域医療の重要な担い手である公立病院の多くを抱える、医師・看護師不足、および地域や診療科による医師・看護師の偏在が挙げられます。加えて急速な人口減少・少子高齢化に伴う医療需要の変化、医療の高度専門化などによる経営環境の急激な変化は、「医療従事者の確保が困難」「経営状況が厳しい」といった状況を生み出しており、2024年4月より開始された「医師の働き方改革」による時間外労働規制などで、今後さらに厳しい経営状況となることが見込まれます。

それぞれの強みを持つ 地域に根差した2つの病院

この「地域医療構想」の流れに沿うように動き出したのが、半田市立と近接する高台の場所への移転を決定したことです。移転先から常滑市民病院との距離はわずか約3km。かなり近接するため、診療圏や医療機能などが重複し、競争が激化するという懸念点が浮上します。その上、前述したとおり、全国の公立病院と同様に両病院も医師・看護師不足という深刻な問題を抱えています。

そこで、すでに2019年から医療従事者の交流があり、これまでも医療連携を推し進めてきた両病院に、経営・診療統合、地方独立行政法人化する構想が浮かび上がりました。一つの組織となることにより設備投資にかかる費用やマンパワーの削減、救急医療体制の充実など、さまざまなメリットが得られ、より安定した医療提供と経営の強化につながると考えられたためです。

新たな病院名は、新半田病院が「知多半島総合医療センター」、常滑市民病院が「知多半島りんくう病院」。経営統合後のそれぞれの機能・役割としては、新半田病院は救急医療を、新常滑市民病院は回復期リハビリテーション医療と地域包括ケアを担い、急性期は両病院で分担する方針です。次ページからは、より詳しく両院長に経営統合に至った理由



▲2015年5月にニュータウンの飛香台に移転した常滑市民病院(新名称:知多半島りんくう病院)。中部国際空港に近いことから、特定感染症病床も整備されている

半田病院と常滑市民病院の経営統合、地方独立行政法人化です。まず、2024年2月現時点の両病院の特徴についてふれておきましょう。

半田市立半田病院は、知多半島医療圏全域の高度急性期・急性期医療を担う、病床数499床の大規模病院です。1982年、市役所に隣接する現在の場所に移転し、救命救急センターを有する三次救急医療機関として地域全体を支えています。加えて、「災害拠点病院」「地域がん診療連携拠点病院」などの指定も受けているのが特徴です。

一方で常滑市民病院は、病床を266床有する中核病院として、急や課題解決に向けての展望を、さらには半田市、常滑市の両市長にも知多半島地域の新たな医療構想実現への思いを聞き、まとめています。ぜひ、知多半島の医療構想を理解し、新たな地域医療の在り方をイメージするきっかけにしてください。

地域医療構想における4つの医療機能

高度急性期 機能

けがや病気の症状が現れ、容体が不安定な急性期の患者の中でも、特に緊急性の高い重症な患者に対し、早急に状態の安定を図るための医療を提供。救命救急病棟や集中治療室などを備え、高度な治療を行う。

急性期機能

けがや病気の症状が現れ、容体が不安定な急性期の患者に対して状態の早期安定化を図り、回復期へと向かうための医療を提供する。

回復期機能

急性期の医療が終了した患者に対し、リハビリテーションなどを通して従来の生活に復帰する支援を行う機能。特に、脳血管疾患や大腿骨頸部骨折などの患者に対し、ADL(食事、トイレ、入浴などの日常生活での動作)の向上などを支援する。

慢性期機能

長期にわたり自宅復帰が難しく、病棟での療養が必要となる患者を入院させる機能。高齢の患者や重度の障害(重度の意識障害を含む)を持つ患者、難病患者なども対象となる。



▶2025年4月に半田病院は、市役所や郵便局など主要施設がある現在の市街地から西側へと移転。常滑市民病院との直線距離は約3kmと、かなり近づくことになる。地図出典: 国土地理院

半田市立半田病院×常滑市民病院

私たちが経営統合する理由、その未来

半田病院と常滑市民病院。別々の市で、ともに知多半島の地域医療を力強く支える両病院が、2025年春に半田病院の移転を機に地方独立行政法人化して経営統合する。半田病院の渡邊和彦院長と常滑市民病院の野崎裕広院長に、どんな意図があるのか、どう変わるのかを聞きました。

※本対談は2023年11月30日に実施したものです

半田病院の移転決定を機に 経営統合の現実化が進んだ

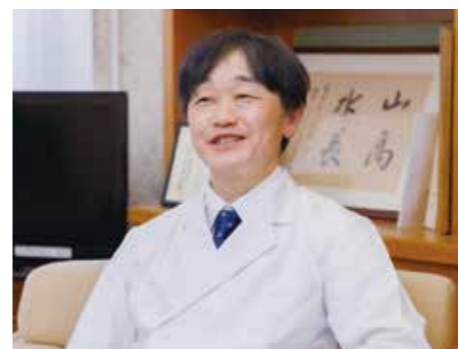
—まず今回の新病院の誕生、経営統合への期待をお聞かせください。

野崎 ●常滑市民病院は移転や新築をするわけではないのですが、新半田病院との距離が近くなることでより密な医療連携が可能になります。知多半島医療圏は、病院の病床数および医療従事者数が愛知県平均を下回っているのが実状です。医師確保を強化するためにも、マンパワーや機能を統合・整理して、知多半島エリアの医療を一つの組織で支えていくことが現実化できるのではないかと大いに期待しています。

渡邊 ●おっしゃるとおりで、今回、検討開始から実に10年越しでようやく移転実現にまでこぎ着けることができ、大きな一歩に、身が引き締まる思いです。当初、半田病院は市役所の職員駐車場に移転する案で決まりましたが、防災面を不安視する住民の声もあり白紙に。最終的に高台にある半田びよログスポーツパークの東側に決まった時、私は「これは良

い方向に物事が進みそうだ」と思いました。

というのも、全国的に超高齢社会や医師不足などの問題を抱える中、一つの市に一つの市民病院という時代ではなくなっています。急性期から回復期、まして緩和ケアや在宅医療までを一つの公立病院で担うのはなかなか難しい。そう考えていたところに常滑市民病院との距離がかなり縮まるということ、これまで以上に医療連携が取りやすくなる。これは統合して、新病院として生まれ変わるチャンスだと。それで半田病院のほうから経営統合を提案させていただきました。この動きは偶然にも国が推進する「地域医療構想」のビジョンと一致し、それも後押しにな



常滑市民病院 院長 野崎 裕広氏

1988年名古屋大学医学部卒業。同大学大学院医学系研究科呼吸器内科研究生、ミシガン大学研究員、社会保険中京病院(現・独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院)呼吸器内科部長、内科部長、総合診療科部長などを経て、2018年常滑市民病院副院長に就任。2023年4月より現職。

半田市立半田病院 院長 渡邊 和彦氏

1991年名古屋大学医学部卒業。同大学医学部脳神経外科研究員、岡崎市民病院脳神経外科医長などを経て、2000年に半田市立半田病院脳神経外科医長として赴任し、2021年より現職。医療安全管理業務に長く携わり、对患者、職員間のコミュニケーションを重視した病院運営を心がける。



—両病院の間には、経営統合の話が進む以前から交流があったとか。

渡邊 ●ええ。先般の新型コロナウイルス感染症の危機においては、両病院での連携が奏功しました。感染症が疑われる救急患者は常滑市民病院がすべて診ると言ってくださって。

野崎 ●その代わりに半田病院からは医師と看護師を派遣いただきました。2病院で短期的ではありましたが、うまく連携できたという体験は大きな財産ですよ。

両病院のそれぞれの役割は？ 救急機能は新半田病院に集約

—経営統合後の役割分担についてはどのようにお考えですか？

渡邊 ●これまで半田病院は高度急性期を中心とした急性期医療を担い、常滑市民病院は急性期・地域包括ケア・回復期を担うケアミックス病院として医療を提供してきました。経営統合後の診療機能の分担については、新半田病院は救急医療を、新常滑市民病院は回復期リハビリテーション医療と地域包括ケアを担い、急性期は両病院で分担する方針です。

野崎 ●それぞれが、これまでの強みをより強化して、連携していくイ

メージですね。最も大きく変わるのは救急医療の外来機能でしょうか。

これまで両病院とも救急患者を受け入れてきましたが、統合後は原則、救急の外来の中心は新半田病院に据えることとなります。

渡邊 ●救急医療はこの地域でも、医師が疲弊する要因の一つです。救急の外来の窓口を一つにするだけでも、マンパワー不足が改善できる。ただ、新常滑市民病院の近くに住んでいる方が、わざわざ新半田病院の救急にいかなくてもいいよう、新常滑市民病院でも平日日中は救急の外来を残し、対応していきます。

—一般的な外来診療についてはどうなるのでしょうか？

野崎 ●実は、より集約的に一般外来も新半田病院へ、と覚悟したこともあったんですよ。けれど、地域住民の利便性を含め、より多くの方に診

統合の主な3つのメリット

- 1 急性期から回復期まで切れ目のない医療を提供できる
- 2 医療従事者を安定的に確保し、働き方改革を推し進められる
- 3 診療機能を分担し、設備や人材を合理的、効率的に活用できる

りましたね。

野崎 ●2つの病院が一つの組織になれば、病院間の競争が激化し、共倒れするような心配もなくなる。また両病院ともに医師・看護師確保は重要な課題でしたが、それもクリアになると考えました。例えば、自身のキャリアデザインとして高度急性期に関心のある看護師の中には、「経営統合後は新半田病院で働きたい」と考える人が出てくるかもしれません。そうした思いにも応えていける。モチベーションの醸成という意味でも、今回の経営統合が良い結果をもたらすといいなと思っています。



療を受けていただくことを主眼に、一般外来は両病院に残しておくべきだと考えを改めました。

渡邊 ●ただ、特殊な外来については、どちらかの病院に患者さんを振り分ける可能性はありますね。例えば婦人科でも不妊治療などは常滑市民病院が得意ですし、腎臓内科にしても透析の設備は常滑市民病院のほうが充実していますので。現在、自治体

移転場所が決まり、新組織として 生まれ変わるチャンスだと

(半田市立半田病院 渡邊院長)

両院長がズバリ回答！ 市民の期待の声・不安の声Q&A

今回の経営統合に関して、半田市、常滑市の住民から上がっている、より生活に密着した疑問や質問をピックアップ。両院長に現在までに決まっている内容を踏まえ、見解を聞きました。

Q 半田病院の移転により自宅から病院が遠くなるのですが、救急搬送に影響はないのでしょうか？

(半田市在住/50代男性)

場所によっては搬送距離や時間が長くなるため、道路整備や知多横断道路に救急車両専用出口を設置するなど、救急搬送への影響を小さくし、搬送時間の短縮を図っています。また、消防からの要請に応じ、医師や看護師が救急現場に出動するドクターカーを配備しており、一刻も早く必要な医療処置を行う体制を整備しています。

(半田病院 渡邊院長)

A

Q 将来的に南海トラフ地震が心配されますが、災害拠点病院として、知多半島総合医療センターの耐震性が気になります。

(半田市在住/30代女性)

新病院は平時のみならず、南海トラフ巨大地震が発災した場合でも継続して医療を提供できることを命題として設計を進めてきました。災害拠点病院としての機能を維持するために、巨大地震を見据えた免震機構を新たに開発し、採用しています。建物は地震発災後も継続して使用することが可能です。

(半田病院 渡邊院長)

A

Q 救急の外来の中心は知多半島総合医療センターが担うそうですが、知多半島りんくう病院では診てもらえなくなるのでしょうか？

(常滑市在住/30代女性)

知多半島総合医療センターにお越しいただくこととなりますが、平日日中(8時30分～17時15分)に自家用車やタクシー、徒歩でお越しいただける場合は、知多半島りんくう病院でも救急外来の診察を実施しますので、ご安心ください。なお、救急車での搬送については、原則として知多半島総合医療センターで受け入れます。

(常滑市民病院 野崎院長)

A

Q 経営統合するということは、知多半島総合医療センターの建設費用を常滑市も負担をすることになるのですか？

(常滑市在住/40代男性)

半田市と常滑市が2021年2月に締結した協定書においては、統合までに生じた両病院に係る投資は、統合後もそれぞれの市が責任を持って負担することとされています。知多半島総合医療センターは、半田市が一部費用を負担した上で半田市立半田病院が予算を投じて建設するものであり、常滑市の費用負担は発生しません。

(常滑市民病院 野崎院長)

A

どう変わる？

統合後の両病院の役割分担

(2024年8月時点)

地方独立行政法人 知多半島総合医療機構

	知多半島総合医療センター (新半田病院)	知多半島りんくう病院 (新常滑市民病院)
病床数	416床	266床
主機能	救急医療・高度急性期・急性期	回復期リハビリテーション医療・地域包括ケア
その他の機能	緊急入院・予定入院、がん放射線治療・化学療法、周産期医療、災害医療(DMAT含む)など	予定入院、(特定)感染症医療、不妊治療、透析医療、訪問看護医療、緩和ケア医療など
救急機能	三次救急医療機関(救命救急センター) 24時間365日	二次救急医療機関 平日8時30分～17時15分

や医師会など関係機関とも協議を重ねて、外来の機能を整理しているところ。いずれにしても、患者さんが困らないような体制づくりが第一だと思っています。

——それぞれ病院の名称も変わるそうですね。

野崎●新法人「地方独立行政法人知多半島総合医療機構」のもと、新常滑市民病院は「知多半島りんくう病

院」、新半田病院は「知多半島総合医療センター」にそれぞれ名称が変わります。2つの病院で「知多半島の医療を総合的・継続的に支えていく」という想いと立地イメージを込め、両病院の職員アンケートで決定しました。地域の皆さんに親しんでもらえたらうれしいですね。

渡邊●一つの組織として2つの病院を持つのは強いメリットとなるはず。機能的にもマンパワー的にも効率化が進み、そして急性期から回復期まで切れ目のない医療提供が実

両病院でよりレベルの高い医療が提供できる。そのために統合を

(常滑市民病院 野崎院長)

現できる。そうしたメリットを生かしつつ知多半島の医療をこの一つの機構で支え、さらに発展させる——それが今回の経営統合の理念です。ただ、一筋縄ではいきません。成功のためには、まず医師をはじめ全職員の意識を高く保つことが重要です。特に看護師ですね。看護師は病院の医療の質を左右する中心的存在。経営統合後も看護師がやりがいを持って働けるような意識づけや環境づくりこそが、良い病院にする基本だと考えています。あとは半田と常滑、お互いの文化の良いところを吸収し合い、より良い病院にしていけたら。現在、医師や看護師、コメディカルを派遣し合って交流をより活発化させているところです。



今回の経営統合は単純に常滑市民の皆さん、周囲の医療機関からき

病院長が大きな半田病院に集約されていくのかなとネガティブに思われる方もいるかもしれませんが、でもそうではなく、むしろ2つの病院がおのおのの機能をアップさせ、よりレベルの高い医療を提供するためのだ

とご理解いただけましたら。2025年4月に向けて、将来を見据えた地域の医療提供体制を強化するための取り組みだということをしっかり伝えて、安心を届けていくこともわれわれの使命だと思っています。

半田市と常滑市の市長に聞いた！

「地域医療を守る」という強い思い

2つの自治体が一つの法人を共同設立し、2つの病院を運営するという全国的にも新しい今回の試み。その実現に向けて注力する両市長に、そこにかかる思いや住民に知ってほしいメリットについて話してもらいました。

※令和5年11月時点の情報です

半田市

安心な医療体制が知多半島の 人々の生活の質向上につながる

——将来に向けた医療提供体制の構築について、市長はどのように展望していますか？

今後、高齢者人口が増加し続けることが予想され、医療は目まぐるしいスピードで高度専門化が進んでいます。一方、少子化により、労働生産年齢にある人口が加速度的に減少しており、医師の働き方改革などの影響もあり医師・看護師をはじめとした医療従事者の不足はさらに拡大していくことが懸念されます。そうした状況にあっ

て、医療の根幹を成すのは医療従事者です。医療従事者こそが最大の医療資源と考え、知多半島医療圏全体で、この限られた医療資源を最大限活用する体制を構築していきたいと考えています。

——知多半島医療圏を取り巻く医療環境には、どのような良い影響があるのでしょうか？

経営統合と病院間の距離の近さを生かし、2つの病院で「急性期から回復期まで切れ目のない医

療」の提供をめざします。病院単位では提供する医療サービスが今までと変わる場合もありますが、医療機能の集約と分担を進めることで、より専門的かつ安定的な医療の提供が期待できます。

例えば、知多半島総合医療センター（新半田病院）にて、救急医療や高度急性期医療を受けた患者が、その後、同じ法人が運営する知多半島りんくう病院（新常滑市民病院）にて回復期医療やリハビリテーションを行うことを想定しています。さらには、医師不足などにより将来的に維持が困難な診療科が、今回の統合により機能を継続できるという可能性が高まることもメリットの一つです。

——今回の経営統合に寄せる期待についてお聞かせください。

近接したそれぞれの病院の強みを生かした経営統合は、病院の機能分担や地域の医療機関との連携によって、救急・急性期から回復期を経て、自宅に戻るまでの地域完結型の医療提供を可能にするものと期待しています。

安心して暮らせる医療体制の構築は、知多半島の人々の生活の質の向上につながるものと考えます。全国的にも例の少ない公立病院同士の経営統合を成功させれば、持続可能な地域医療提供体制の確保に向けた一つのモデルケースにもなるのではないかと考えています。

常滑市

暮らしに欠かせない医療を 安定的・継続的に届けるために

——2病院の経営統合が進む中、今どのような思いですか？

私は市議会議員時代から現在まで「ずっと常滑」というキャッチフレーズを掲げ、住み続けたいまちづくりを進めています。少子高齢化・超高齢社会へと進む中で、住み慣れた地域で誰もが安心して生活でき、この地域で人生の最後を迎えられるような環境を整えることが大切だと考えます。

そのために最も重要なのが「医療」。地域住民のニーズに合わせ

た切れ目のない医療提供を実現し、その機能が継続的に維持されなければ、地域で暮らす安心は得られません。その環境づくりのために尽力したいと考えています。

——今回の経営統合によるメリットをお聞かせください。

全国的な医師不足により医療従事者の確保が難しくなる中、その問題を打開する策の一つのモデルをお示しできればと思っています。また、国が公表した「公立病

院経営強化ガイドライン」では、「感染症への平時からの取組」が新たに追加されましたが、例えば新型コロナウイルス感染症のようなパンデミックが再び起きた際、近隣に2つの病院が併存することで、うち一つを感染症対策に特化し、もう一つが急性期を継続的に担い通常診療にあたるという動きが可能です。2つの病院を1経営体が運営するメリットが最大限生かされることを期待します。

——地域住民にはどのような良い影響があるのですか？

三次救急を担う新半田病院が圏域のほぼ中央に位置し、知多半島道路に近接することからも患者搬

送時間の短縮による救命率の向上が期待できます。そのために、両市で知多横断道路に救急車専用の緊急退出路を整備し、救急受け入れ体制の強化を支援します。

これまで特に常滑市民病院では、医師不足などによる深夜帯の救急受け入れ休止など、市民に医療提供体制についてご心配をおかけしていましたが、医療従事者の確保が強化できることに。また2つの病院が機能を分担し、強みを生かした医療を提供しながら、効率的な運営を図ることが可能となります。住民の暮らしに欠かせない医療をより安定的・継続的に確保し、暮らしの安心をご提供できるものと考えています。



半田市長
久世 孝宏氏

1974年名古屋生まれ。名古屋大学工学部卒業、同大学大学院修了。自動車部品メーカー入社後、半田市に移住。半田市議会議員（4回当選）を経て、2021年半田市長に初当選。趣味はテニスと野球、祭り。

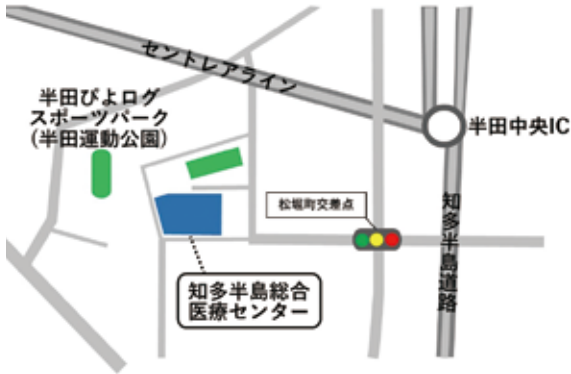


常滑市長
伊藤 辰矢氏

1978年常滑生まれ。愛知学院大学文学部卒業後、介護施設に入職。衆議院議員秘書、常滑市議会議員、愛知県議会議員を経て、2019年常滑市長に初当選。現在2期目。趣味は料理とゴルフ、旅。

アクセスマップ

知多半島総合医療センター



車

- ・知多半島道路半田中央ICを降りて約5分
- ・JR武豊線「半田駅」から約20分
- ・名古屋鉄道河和線「知多半田駅」から約20分

知多半島りんくう病院



バス/コミュニティバス

名古屋鉄道 常滑線「常滑駅」停留所から
「常滑市役所・常滑市民病院」停留所まで 約10分運行
※停留所名は変更となる見込みです

電車

名古屋鉄道 常滑線「常滑駅」下車：徒歩約30分

車

知多横断道路（セントレアライン）
常滑ICを降りて約2分



地方独立行政法人
知多半島総合医療機構